

Press Release

プレスリリース

2008年7月17日

株式会社日本医療データセンター

報道関係各位

日本医療データセンター 『JMDC データで読むヘルスケアレポート』 vol. 8

『 γ (ガンマ)-GTP』は生活習慣病のバロメーター 肝機能低下のグループは、高血圧、高コレステロール値も2倍

医療データベースの構築・分析及び健康保険組合へのソリューション提供を行う、株式会社日本医療データセンター（東京都千代田区、代表取締役：木村 真也）が実施した調査によると、飲酒量が関係する指標で、肝機能の状態を表す検査「 γ (ガンマ)-GTP」値による生活習慣病（糖尿病・高血圧症・脂質異常症・高尿酸血症、）の有病率は、「 γ -GTP」の値が高めの人ほど、各疾患の有病率も高い傾向にあることがわかりました。

この結果は、日本医療データセンターが契約する健康保険組合加入者で、2006年4月～2007年3月の1年間に健康診断を受けた人 39,684人（30～59歳男性）の「 γ -GTP」の数値を、101 IU/l 以上、101 IU/l 未満で分類・解析して判明したものです。「 γ -GTP」の値が高め（101 IU/l 以上）の人と、低め（101 IU/l 未満）の人で各生活習慣病の有病率を比較したところ、糖尿病で4.5ポイント、高血圧症で10.3ポイント、脂質異常症で10ポイント、高尿酸血症で6.5ポイント、肝機能数値が高めのグループが有病率も高く、特に高血圧症や脂質異常症においては、有病率の差が2倍に及ぶことがわかりました。また、年代とともに高くなると言われている生活習慣病の有病率ですが、肝機能検査においても高値の人の割合が同様に増えており、過度の飲酒習慣と生活習慣病罹患リスクは密接な関係があることが医療データより明らかになりました。

この分析から、北里大学医学部 佐藤敏彦准教授（公衆衛生学）は、以下のようにコメントしています。

「適度な飲酒は、血液の循環を良くしたりストレスを緩和したりする効果がありますが、度を越えた飲酒習慣は生活習慣病の引き金になってしまうことがあります。医療データの解析では、年代が上がるほど検査数値も高くなる傾向にあるようですが、飲酒量が増えていくことは考えにくいので、年齢と共に長年の飲酒が肝臓の耐性を弱めることを示す結果と考えられます。また、大量の飲酒生活を続けることは、気づかぬうちに肝臓を痛めてしまうばかりか、生活習慣病の罹患リスクも高めてしまいます。適度な飲酒量でお酒を楽しみましょう。」

■ 本件に関する問い合わせ先

株式会社日本医療データセンター ヘルスケア事業部 担当 小沼・大澤

メールアドレス：FAQ@jmdc.co.jp (TEL):03-3511-6781 (FAX):03-3511-6782

Press Release

プレスリリース

◆資料

■ γ -GTP が高め(101 IU/l以上)の人の比率

30代	4.5%
40代	9.0%
50代	10.3%

(分析期間:2006年4月~2007年3月 分析対象:30~59歳の男性 γ -GTP 健診受診者 44,941人)

■病気別有病率の違い

【 γ -GTP が高め(101 IU/l以上)の人】 【 γ -GTP が低め(101 IU/l未満)の人】

糖尿病	9.7%	5.2%
高血圧	19.7%	9.4%
脂質異常症	19.6%	9.6%
高尿酸血症	10.5%	4.0%

(分析期間:2006年4月~2007年3月 分析対象:30~59歳の男性 γ -GTP 健診受診者 39,684人)

■関連情報

メタボリックシンドローム対策レシピ「Pep! eco-recipe(エコレシピ)vol.14」に詳しい情報が掲載されています。

詳しくはこちら: <http://www.jmdc.co.jp/eco-recipe>

◇JMDC データで読むヘルスケアレポートとは

株式会社日本医療データセンターが、月1回発表するレポートで、同社独自の技術を用いたJMDCデータ*を利用して、リアルな患者のデータから、日本人の健康や疾病の傾向を分析するものです。

*JMDC データ: 株式会社日本医療データセンターが約33万人(2007年11月現在)の健康保険組合加入者から収集した健康診断の情報やレセプト情報を解析したデータ。個人を特定しないよう加工され、時系列での処理が可能のため、治療の経過などを疫学的に検証することが可能。

◇日本医療データセンター(<http://www.jmdc.co.jp/>)

個人を特定しない医療データ生成・分析を行うことができる、日本で初めての会社として、健康保険組合および製薬会社などにデータ活用ソリューションを提供しています。かつては個人情報の問題と、医療機関ごとに異なる用語やフォーマットによりデータとして利用することが難しかったレセプトですが、日本医療データセンターでは、これまで約1,080万件(2008年3月末時点)のレセプトデータの処理実績で培ったノウハウから、傷病、医薬品、診療行為、投薬などの分析マスターを独自で作成いたしました。本年4月から開始された特定保健指導の本格的実施により、データの基盤整備と解析手法のニーズが拡大していきます。日本医療データセンターは、こうした施策を改善に繋げるために、「データによる検証」を提言し一翼を担ってまいります。